

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第102号



混戦時代のチャンピオン芥川誕生
松本常彦
特設展「作家のデビュー展」
展示資料より
2
追悼 川手千興 その大きな背中
廣瀬 孝嘉
3
4

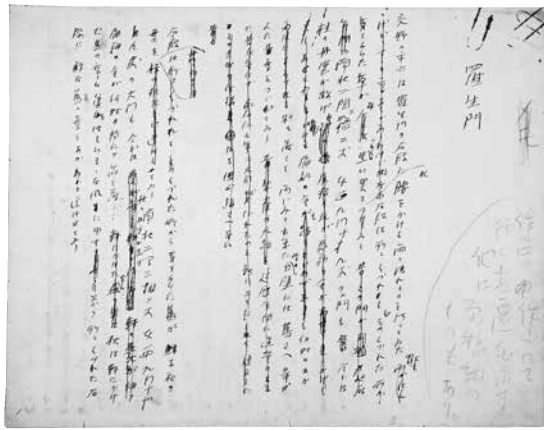
追悼 高室陽二郎 その見識と志と
—高室陽二郎氏の逝去を悼む— 井上 康明
—高室陽二郎氏の逝去を悼む— 井上 康明
閲覧室より・寄贈資料より
資料翻刻 八木義徳 熊王徳平宛書簡
館からのご案内
館の日誌 利用のご案内
8 7 6 5 4

特設展

「作家のデビュー展」開催

平成二十九年七月十五日(土)～八月二十七日(日)

本展では、山梨にゆかりの深い作家のデビューの頃に注目し、作品の魅力や、当時のエピソードを紹介する。樋口一葉、芥川龍之介、太宰治など近代作家の初期の作品をとりあげ、また、山梨県出身で現在活躍中の林真理子、保坂和志、神永学、辻村深月の直筆原稿も展示する。



「羅生門」関連ノート 当館蔵

小説の師・半井桃水が創刊した文芸雑誌「武蔵野」(一九九二年三月)に処女作「闇桜」を発表し、小説家としての第一歩を踏み出した。しかし、歌塾・萩の舎で二人の関係が噂されるようになってからは、しばらく交際を絶った。その頃に書かれた一葉の桃水宛書簡下書き(一九九二年秋)には、「新聞の上にてお作を拝し候時のミ少しなぐさむ心地に御坐候」などの文言が見られ、会えない中で高まりゆく思慕の情が表されている。

また、高校教科書でおなじみの芥川龍之介(一九九二～一九二七)の小説「羅生門」は、第一創作集『羅生門』(一九一七年五月、阿蘭陀書房)のタイトルにもなった初期の代表作。発表された本文では、主人公の呼称は「下人」となっているが、今回出品する関連ノートや草稿には、「一人の侍」「交野平六」「一人の男」「交野五郎」など、様々な呼び名が使われており、推敲を重ねた跡が見られる。「帝国文学」(一九一五年十一月)に発表された後、「羅生門」に収録された。

なお、展覧会期中には、コミックやア

■特設展関連イベント

○辻村深月講演会
「フィクションの向こう側」

山梨県笛吹市出身の直木賞作家・辻村深月さんと当館館長・三枝昂之との対談形式の講演会です。

※要申込

7月30日(日)午後1時30分

講師 辻村深月(小説家)

聞き手 三枝昂之(当館館長、歌人)

参加費 無料

会場 講堂 定員500名

○特設展関連講座(年間文学講座3)

「太宰治 デビューの頃」

※要申込

8月3日(木)午後2時

講師 伊藤夏穂(当館学芸員)

参加費 無料

会場 研修室 定員150名

○子どもワークショップ ※要申込

「デコパージュで『赤毛のアン』を身近に」

「赤毛のアン」(モンゴメリ作・村岡花子訳)に登場するモチーフをデコパージュで身近な物に飾り付けます。

予告 企画展

「津島佑子展」

9月23日(土・祝)～11月23日(木・祝)

平成二十八年二月に逝去した作家・津島佑子の初の展覧会。「火の山―山猿記」では、母・美知子の実家である石原家をモデルに、甲州を舞台とした三代にわたる一族の人々と時代を、壮大なスケールで描いた。

混戦時代のチャンピオン芥川の誕生

松本常彦

かつて国民の多くが、家族が戦地に赴く悲哀を知っていた。その悲哀を詠んだ与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」(明治三十七年)は有名だが、夫の鉄幹にも「血写歌」(明治三十年十一月作)という詩がある。「あゝあゝ人を殺せよと／えせ聖人のをしへかな」と結ばれる七連の詩で、第二連に「親もあり／妻もある子を／名をつけて／勇しき名のチャンピオン」とある。このチャンピオンは兵士や戦士の意で、皮肉な響きがあることは「正義とは／悪魔が被ぶる仮面にて／功名は／死をよるこぼす魔術かな」(第一連)からも明らかだ。

「大正期文壇のチャンピオン」、芥川龍之介を、そう評したのは佐藤春夫である。ここでは現在一般に通じる意で、もとより皮肉はない。チャンピオンの印象は、

デビュー期の作品をまとめた『羅生門』

(大正六年五月、阿蘭陀書房)で早くも刻印された。たとえば、前田晁は「文章新語」(『文章世界』大正六年十一月)で「新技巧派のチャンピオンの一人」と呼んでいる。山梨の出身で、年齢も一回り以上の苦勞人である前田は、自然主義の衣鉢を継ぐ点でも芥川と対照的だが、発言に皮肉の匂いはない。芥川のデビューは、いかにも鮮やかであつたらう。ただ、「の一人」とする前田の発言には「戦士」の含みもあるかもしれない。それはそれで、遺稿「或阿呆の一生」の最終章を「敗北」と題し、「言はば刃のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら」と結ぶ芥川の最後の自画像と響きあう。

チャンピオンの誕生には、総当たり戦にせよ、トーナメント戦にせよ、競技場

やリングなどの舞台とそこでの競争や試合が前提となる。そして、大正期は、まさに文学のリーグ戦の時代、作家たちがチャンピオンフラッグやカップを目指して鎬を削った時代ではなかったか。

芥川にとつても名トレーナーだった夏目漱石には、そうした文学リーグの到来が見えていた。「文壇の趨勢」(『趣味』明治四十二年一月)で、「日本の文壇はどう変化するか」と問われ、そういう「大問題は中々分りにくい」としながら、これからは「似寄つた武器と、同種の兵法剣術で競争をやる」「同圏内の競争」が激しくなる、それとともに従来の「模擬者でもなければ、同圏内の競争者でもない」「圏外の敵」が参戦し「文壇は多種多様になつて、互に競り合(あ)が始まる」と語る。その上で「競争はとうてい免がれ」ず、そうでなければ「作物は進歩」せず、「圈内圏外」での「混戦時代」になるのは「天下の趨勢」と断じている。

芥川の「大正八年度の文芸界」や「大正九年の文芸界」は、文学史や文壇の鳥瞰図として高く評価されるが、それは大正期がイズムやグループの「混戦時代」だったからであり、「圏外の敵」として参戦しチャンピオンとなつた芥川は、「混戦」の優秀な観客でもあつたからである。

芥川の大正十年代の作風の変化や種々の試みも、かつての自分と同じく新たに参戦した「圏外の敵」に応じるチャンピオンの「競り合」であつたらう。

雑誌「改造」(昭和四年八月)の懸賞評論の当選作が宮本顕治「敗北」の文学(二席)と小林秀雄「様々なる意匠」(二席)であつたことは、昭和文学の黎明を告げる象徴的な一事とされる。前者が、チャンピオンの「敗北」の観戦記とすれば、「今日日本文壇のさまざま意匠」を検討した後者は、「混戦時代」の「武器」と「兵法」の吟味にほかならない。

この二つの評論が、「モオパスサン、ボオドレエル、ストリンドベレイ」から「ハウプトマン、フロオベエル」と「様々なる意匠」を数える「時代」に始まり、先に引用しておいた「敗北」で終わる「或阿呆の一生」の首尾と呼応するのは、それこそきわめて象徴的である。

チャンピオンの誕生は、何より「混戦時代」の到来によって要請されていた。その戦いは、かならず「敗北」に終わるのである。しかし、その必然を知っている観客には、くだんの「敗北」の自画像は、真にチャンピオンに似つかわしい肖像に見えるのではあるまいか。

(九州大学比較社会文化研究院教授)

■特設展

「作家のデビュー展」

展示資料より

①「武蔵野」第一編

一八九二(明治二十五)年三月二十三日

古今堂

当館蔵



「武蔵野」第一編

樋口一葉の小説の師である半井桃水が

計画主宰した文芸雑誌。目次には「三月十三日出版」とあり、ゴム印で「二」を加えて「二十三日」と改められているが、一葉の日記によると実際は、四日遅れて二十七日の刊行となったという。一八九一(明治二十四)年四月十五日、一葉は妹くにの友人である野々宮きく子の紹介で桃水を訪問し、小説の指導を受け始める。一葉は、桃水に題材等の助言を得ながら「闇桜」を発表し、小説家としてのデビューを果たした。本誌には、桃水に続いて、門下の畑島桃蹊、小田果園のほか、正直正太夫(斎藤緑雨)の名も見える。一葉は、「武蔵野」第二編に「たま櫛」、第三編に「五月雨」を発表し、第二

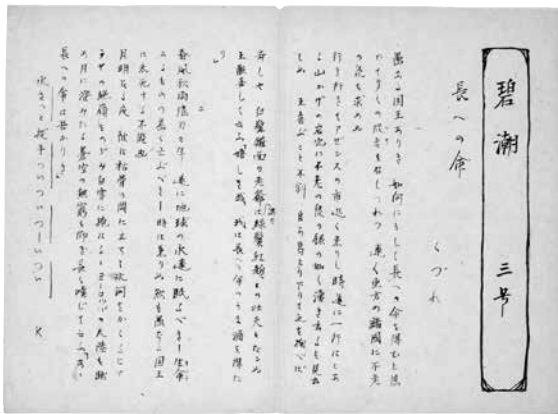
編以降は表紙の題字も手がけるが、売れ行きの減退や桃水の療養などの理由から、同誌は第三編で廃刊になった。

②回覧雑誌「碧潮」三号

一九〇八(明治四十一年)二月二十八日

当館蔵

「碧潮」は芥川が、東京府立第三中学校在学中に編集した回覧雑誌。芥川は、第三号に「くづれ」の署名で「長への命」とともに、「我輩も犬である」(表題、署名なし)を発表した。「長への命」は、「愚なる国王」が、「不老の泉」を求め不死の身体を得、地球滅亡後もなお生き残る話。一方、「我輩も犬である」は、冒頭の「我輩も犬である 名前は勿論ない 何處で生れたか忘れて仕舞つた」からわかるように、夏目漱石の「吾輩は猫である」(一



回覧雑誌「碧潮」三号



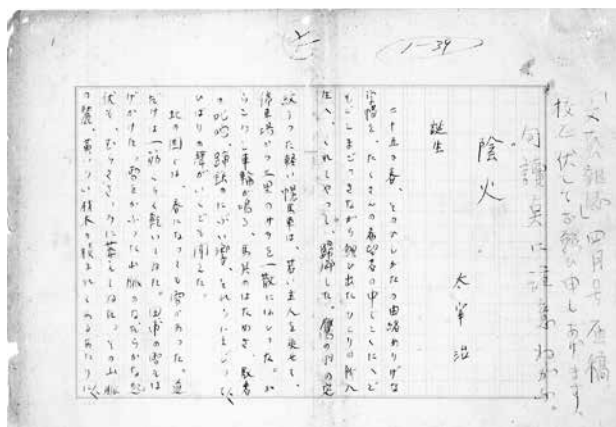
芥川龍之介「我輩も犬である」 「碧潮」三号掲載

九〇五年一月〜一九〇六年八月「ホトトギス」掲載)のパロディ。内容は、「中学校の生徒」である主人公が、「古句新註」と「ホト、トギス」を買い求め俳句作りに熱中するも難渋する話を中心とする。末尾には「(以下次号)」とあり、続稿を予定していたとみられる。芥川は後に漱石から「鼻」を激賞されたことで知られるが、中学時代から漱石作品を念頭に置いて創作をしていたことが窺われる。

③太宰治「陰火」原稿

当館蔵

「誕生」一紙の鶴「水車」「尼」の四編から構成され、「太宰治」の署名では、現存する活字となった作品のなかで最も古い原稿とされる。全三十九枚。一枚目の原稿の欄外には、鉛筆で「文藝雑誌」四月号原稿。校正伏してお願ひ申しあげま



太宰治「陰火」原稿

す。句讀点に注意ねがふ。」と書かれている。本原稿は、一九三五年(昭和十)年八月に雑誌「文藝」編集部に送付されたが、翌年三月号までに掲載されなかったため、一旦太宰の許に返却され、一九三六年二月末に砂子屋書房編集者の浅見淵宛に送付された。なお、一九三五年十二月十二日消印の浅見淵宛葉書にも、「陰火」ですが、これは、「文藝」の二月か三月号に発表になるだらうと思ひます。若し、四月号なら、未発表のまま、原稿四十枚、とりかへして、お送りいたします。」とある。「陰火」原稿は、一九三六年四月に砂子屋書房発行の「文藝雑誌」に発表された後、同社から刊行された太宰の第一創作集『晩年』(同年六月)に収録された。(学芸課 伊藤夏穂)

■追悼 川手千興

その大きな背中

廣瀬 孝 嘉

思えば、葬儀の式場に飾られていた遺影のあのにこやかなお顔そのままに、川手千興先生の周りにはいつも穏やかな空気が流れていました。私どもが近づいていくと、決まって片手を挙げ、笑みを浮かべながら迎えてくださいました。そんな高潔で円満な先生の下には、幾重もの人の輪ができていました。

先生は文学館との関係も深く、県教育長在職中、三好行雄初代館長の急逝により館長事務取扱を兼任し、その重責を全うされたばかりか、退職後も文学館参与として『芥川龍之介資料集』の教材化と活用に道筋をつけたり、文学講座「樋口一葉の小説と日記」の講師を務めたりなど、草創期の文学館づくりに大きな足跡を残されました。また十五年間、文学館協力会の会長としても活動され、今日の礎を築かれました。この間、地域の文学講座などの講師も務められ、その深い学識ゆえに多くの受講生から絶大な信頼と敬愛を集めていました。

学校法人山梨学院に招聘されてから

も、文学への熱い思いは変わらず、酒折宮が連歌発祥の地であることに因んで創設された酒折連歌賞の実行委員長として、二人唱和の片歌問答「酒折連歌」の普及・発展に情熱を傾けられました。

病が発覚した昨年六月からは、「酒折連歌」の創始者として解説本の執筆に執念を燃やされ、十一月末には自らの集大成として『酒折連歌 言葉を連ね 心を繋ぐ』を上梓し、県内の図書館や中学校、高等学校などに寄贈されました。そして、十二月下旬に入院され、正月早々には帰らぬ人となってしまわれました。まさに至誠一筋、為すべきことを成し遂げて安らかに旅立っていかれました。

今更ながら、その大きな背中に襟を正される思いです。臉を閉じると、先生の端正な佇まいや語り口、お声までもが脳裏をよぎります。先生はこれからも、在天の星となつて多くの人を見守り、導いていかれるに違いありません。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

(元山梨県教育長、山梨県立文学館協議会会長)

*川手千興氏は山梨県教育長、山梨県立文学館参与、山梨県立文学館協力会会長を歴任。平成二十九年一月三日逝去されました。

■追悼 高室陽二郎

その見識と志と

—高室陽二郎氏の逝去を悼む—

井上 康 明

高室陽二郎氏が生まれた高室家は、戦国時代の武田家由縁の医家であり、一茶などとも交流のあつた俳句の家でもある。その高室家住宅は、国の重要文化財に指定され、現在修復工事が進んでいる。政治、経済から音楽、文学に至るまで幅広い教養と見識を備えた陽二郎氏の話は私たちが魅了し、折に触れ文化財及び文化の公共性について語った。高室家住宅の修復の完成を見ずして亡くなったことは無念だったろう。

昭和五十年代半ばからは、文学館の創設に尽力された。設立のための懇話会委員を務め、芥川龍之介資料の収集に貢献し、平成元年開館への推進力となった。当時の県知事は、望月幸明氏である。平成三年からは山梨放送の社長を務められた。翌年からは文学館専門委員として、その後二十数年に亘り文学館の運営について広く助言を重ねてこられた。学芸課職員としてその警咳に接し、多くを学び得たことは幸いであった。

その長身は颯爽として、学生時代より各山岳会に所属し、南アルプスの山岳に親しまれた。北海道をはじめ日本各地、

海外の名峰へ遠征、共著にガイドブック『南アルプス』があり、随想集『山と人』には永年のさまざまな人への思いが籠る。平成十七年、当時の近藤信行館長が推進した「山の文学展」では図録に「楨さんのピッケル」と題して、二十歳の頃、その著『山行』に感激して茅ヶ崎の楨有恒を訪ねた思い出を語っている。

氏の父高室呉龍は、飯田蛇笏の高弟のひとりであり、蛇笏句碑建立の際、建設委員会の副委員長として務めを果たした。平成二十六年の飯田龍太文学碑建設に際しては、今度は陽二郎氏が建設委員会副委員長として力を尽くされた。文学館の正面右にある「水澄みて四方に閃る甲斐の国」と刻まれた飯田龍太碑は、氏が中心となつて文案を練つた説明を付す。その一節「生涯家郷にあつて甲斐の風土を愛し我が国文壇に多大な影響を及ぼし」とは氏の生涯にも当てはまるだろう。「龍太先生あれこれ」と題した講演において氏は、龍太文学の底には悲しみが潜んでいると語った。その熱誠を思い出す。今はただ御冥福を祈りたい。

(元山梨県立文学館学芸幹 俳人・「郭公」主宰)

*高室陽二郎氏は山梨県立文学館構想策定懇話会委員、山梨県立文学館建設懇話会委員、山梨県立文学館専門委員を歴任。平成二十九年四月十七日逝去されました。

閲覧室より

一葉もすなる千蔭流

「一葉が習ったという千蔭流の書体を書いてみたい。手本になるような本はあるか。」という質問を受けた。

当館の閲覧室では、画像情報システム端末で、樋口一葉(一八七二—一八九六)が書いた原稿や書簡など館蔵資料の一部を見ることが出来る。一葉の流れるような美しい字は、「千蔭流」と呼ばれる書体で、江戸の和学者、橘(加藤)千蔭(一七三五—一八〇八)の書の流儀である。江戸後期に一世を風靡し、門人はじめ戯作者、遊女、俳優などが好んで学び、広く親しまれた。明治期になっても歌人の間で流行し、一葉が学んだ萩の舎の中島歌子(一八四四—一九〇三)もその書を加藤千浪(一八一〇—一八七八)から学び、門人たちに伝えた。

橘千蔭は、江戸町奉行与力を務めながら歌人・書家としても認められ、絵画や狂歌にも秀でた風流人であった。幼くして賀茂真淵に学び、『万葉集』『古今和歌集』などの古典に親しんだ。五四歳で官職を辞したあとに著した『万葉集略解』は、万葉集の入門書として広く知られている。

さて、千蔭の書体の手本となる法帖類であるが、江戸後期に、『ゆきかひふり』『芳野道の記』『新百人一首』『新三十六歌

仙』など、多く出版され、明治以降も続いて出されており、その人気のほどが窺える。

当館では『仮名文中宮帖』『古今和歌集仮名序』(閲覧には事前の手続きが必要)等を所蔵している。

国立国会図書館デジタルコレクションでは『新採百首』『仮名の鏡』等が、早稲田大学古典籍総合データベースでは『うけらが花』『ゆきかひふり』等が画像で公開されており、千蔭の書が確認できる。

一葉は、明治十九年十四歳の時に小石川にあつた中島歌子の萩の舎に入門し、和歌や古典文学とともに千蔭流の書を学んだ。一葉の日記『蓬生日記』には、上野の東京図書館で千蔭の法帖『月次消息』を閲覧し、「月なみ消息の流暢なるをうらやましうおもふもかひなし」(明治二十四年九月二十六日)と記され、自分の才のなさを嘆いている。

また、明治二十六年五月の同日記には、「同じ師のもとにおなしき手本をならひたるか中に、さてかれこれひとしきは少なかりけり、花圃女などのにほひやかに愛敬ありて、しかも老筆めきたる」とあり、門人のなかでも、花圃の書が句うように美しく老練で群を抜いており、自分などはとうてい及ばないと記している。花圃とは、三宅龍子(一八六八—一九四三)のことである。萩の舎で一緒に学んだ先輩で、明治二十一年に小説

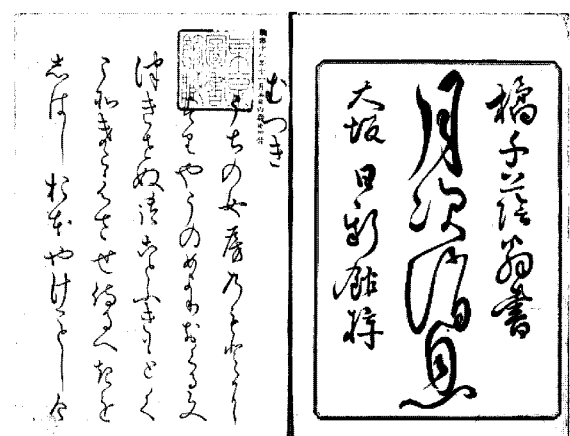
『薺の鶯』を刊行し女流作家の先駆けになるとともに、一葉に少なからぬ影響を与えた。

一葉や龍子はもちろんのこと、萩の舎で千蔭流を教えた歌子も、歌子が学んだ千浪も、直接千蔭に手ほどきを受けることはなかったが、皆同じ師の書を習い、好んで書き綴った。

『樋口一葉日記 翻刻』(岩波書店二〇〇二)には、千蔭、千浪、歌子、龍子、一葉の書が並べて紹介されており、興味深い。

また、一葉が東京図書館で閲覧した『月次消息』(日新館 一八八五)は、国立国会図書館デジタルコレクションでその全文を見ることが出来る。

(資料情報課 飯沼典子)



『月次消息』橘千蔭書(国立国会図書館蔵)

「寄贈資料より」(平成二十九年二月〜四月)

○白須はるみ氏より「彩りの郷にて」挿絵原画二十四点。

○西沢武徳氏より「風の町」挿絵原画二十四点。

○志村さとみ氏より「山靈観音」挿絵原画二十六点。

○今川徳三氏より諸田玲子書簡など特殊資料七点 図書一点。

○堀内万寿夫氏より熊王徳平書簡など特殊資料十三点、図書七点、雑誌一点。

○伊藤一郎氏より「久米正雄と芥川龍之介の青春」抜き刷りなど特殊資料二点、雑誌一点。

○三橋透氏より「創立百十周年記念」リーフレットほか特殊資料二点、図書一点、雑誌二点。

○小林秋生氏より文壇バー「みちくさ」の「御手當貴」ほか特殊資料七点。

○佐野秀延氏より五木寛之「流されゆく日々セレクトション」パンフレット一点、図書一点、雑誌一点。

○山盧文化振興会より「山盧俳諧堂竣工式資料」一括など特殊資料二点。

○中央葡萄酒株式会社より「周五郎のヴァン」ワインボトル。

○武田尚子氏より「近代新興実業層の経営資源と社会移動プロセス」抜き刷り一点、雑誌一点。

○小山弘明氏より「第六十一回 連翹忌」リーフレット一点、図書一点、雑誌一点。

○高室陽二郎氏より辻邦生書簡三点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

- 秋山 亮二 中田 水光
 - 石本 晴代 中村 吾郎
 - 一瀬 公弘 秦 恒平
 - 兎束 保之 備仲 臣道
 - 尾崎 昭代 平岡 敏夫
 - 小俣 はる江 平松 伴子
 - 神田 昌道 松本 章男
 - 黒沢 忍 松本 皎
 - 篠崎 美生子 守安 敏久
 - 塚田 吉昭 山崎 敬子
- この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

資料 翻 刻

八木義徳 熊王徳平宛書簡(封書)

一九七〇(昭和四十五年)年三月二十四日

拝呈

御新著「河鹿川」を御恵贈いただきありがとうございます。存じました。お礼は全篇を拝見した上でと思いいながら、自分の仕事に追われるまま失礼しておりました。

ただいまお作を読了しましたので、やっとお返事が書けることになりました。

女主人公のお里は、一見情熱的にみえながら、シンに勁いものを持ったしっかり者の女性ですが、いかにも強健な甲州女の典型と思えました。曲折と波瀾の多い半生を辿りながら、この女性にはデカダンスというものが全くありませんね。御本のオビに、著者のことばとして、「永井荷風と近松秋江に心酔している」とありましたが、この二人の作家と、「河鹿川」の作者とのいちばん大きい違いは、ここにあるように思いました。たとえばお里はどんな場合でも「勤労者」としての生活をもち、しかもその仕事にまじめに打ちこむ、という性格です。

(荷風や秋江の女性は「勤労者」というよりはむしろ「享樂者」で、彼女らのえらぶ職業はほとんど水商売といわれる職業で、しかもほとんどが性的デカダンスに陥ちてゆく女性が多いようです) このお里ばかりでなく、「河鹿川」に登場する人物

はすべて、いわば勤労者としての地道な「生活」をしつかり持っています。

将来に作家を夢見る幸作すら、きわめて朴直強健な人物で、あそび人的デカダンスや、生活蔑視のシニカルな傲慢さはほとんど全くありません。

お作を拝見して、小生はこのことをいちばんよく感じました。そして、作者がいろいろな職業を持つている人間をよく知っている(単なる観察者としてでなく)ことに、小生は羨望を感じました。ただお作に不満を申しあげれば、女主人公のお里が幸作を「捨てる」その動機づけがすこし浅かったように小生は思いました。(もつともこの小説に描かれている時代が昭和のはじめですから、家族制度という奴が戦後のいまとは比較にならないほど強力だった、ということがあるかもしれませんが：しかしこの二人の間にはともかくも「愛」があつたはずであり、しかもお里は家をとび出してまで幸作と夫婦になった女のはずです) しかしこんなふうな感想を申し上げていければキリがありませんから、これでやめます。

× × ×

それから「風景」編集部へ送られた随想は小生のほか四人の編集委員に読んでもらいました。しかし「風景」ではいままでも執筆依頼の原稿だけを載せるのが建て前であつて、投稿されたものはずべてお返ししてきたのだから、これからもずっとその建て前を通して行くべきではないか—という編集委員たちの一致した意見でした。以上の理由で、御投稿は近日中に編集部からお手元へ返却させていただきますが、どうぞあしからず御了承下さいますよう。

右とりあえずおわびとお礼のみ申し上げます。

三月二十四日夜

拝具

熊王徳平様

八木義徳

〈受〉山梨県南巨摩郡増穂町青柳町

熊王徳平様

〈発〉三月二十四日

東京都町田市山崎団地

八木義徳

電(〇四二七) 91-八六〇九(スタンプ)

〈註〉本書簡は二〇一六(平成二十八)年度に購入した資料。縦二十一センチ×横十八センチの「T・S」製灰色野便箋五枚にブルーブラックインク使用。消印は「鶴川45. 3. 25」。

熊王徳平(一九〇六—一九九一)は、現在の山梨県南巨摩郡富士川町生まれ。増穂小学校を卒業後、家業の理髪店を継いだ。行商を行っていた時期もある。一九三一(昭和六)年、日本プロレタリア作家同盟山梨支部を創立。一九四〇(昭和十五)年四月、創刊に携わった「中部文学」に掲載された「いろは歌留多」は、同年、第一回「文藝推薦」作品(改造社主催)の候補となった。また、一九五八(昭和三十三年)刊行の『甲州商人』三部作は、翌年、東宝により「狐と狸」の題で映画化されている。『河鹿川』は、一九六九(昭和四十四)年六月、五月書房から刊行。

八木義徳(一九一一—一九九九)の父・田中好治は笛吹市春日居町、妻・正子は南アルプス市の出身。八木は、一九七〇年四月から翌年の五月まで「風景」の編集人をつとめた。

(翻刻者 学芸課 保坂雅子)

■教育普及事業報告

○三枝浩樹初心者短歌教室
五月十三日、六月三日にわたり、山梨県歌人協会会長の三枝浩樹氏を講師とする初心者向けの短歌教室を実施した。第一回は「歌を詠む愉しさから始めよう」をテーマに短歌の基本について講義で学んだ。二回目は参加者の実作した歌をもとに講義が進められた。最終回の六月十七日には参加者による歌会を実施する予定。



○特設展「歿後五十年 山本周五郎展」
関連ワークショップ「ペーパークイリングで風鈴を飾ろう!」周五郎が描いた江戸の暮らしをイメージして!
六月四日、ペーパークイリング作家・佐々木綾子氏を講師にワークショップを実施した。江戸の風物である金魚と風車をペーパークイリングで作り、風鈴の短冊に飾り付けた。

館からのご案内

■教育普及事業

○文学創作教室 要申込

・「小説講座」

7月9日(日)午後1時30分

講師 長野まゆみ(小説家・やまなし文学賞小説部門選考委員)

会場 講堂(定員500名)

○「短歌講座」

9月9日(土)午後1時30分

講師 三枝昂之(当館館長、歌人)

会場 研修室(定員40名)

※詳細はお問い合わせください。

○夏のワークショップ 要申込

「大人も楽しい伝統芸能」能の世界を体験しよう!

甲府市出身の能楽師・佐久間二郎氏を講師に迎え、実際に能を体験します。

7月25日(火)午後1時30分

講師 佐久間二郎(観世流能楽師)

会場 講堂

定員30名(大人も参加可能)

持ち物 足袋または白い靴下、筆記用具

参加無料

○「レーザーフラフトでブレスレットを作ってみよう!」

木製ビーズと革でブレスレットを作ります。男女どちらでも身につけられる格好いいブレスレットです。

8月5日(土)午後1時30分

講師 近藤和郎(レーザーフラフト工房フロンティア)

会場 研修室

定員 小学4年生以上20名。大人の参加は御遠慮ください。

材料費 500円

※詳細はお問い合わせください。

○年間文学講座 要申込

講座1「甲州地誌『裏見寒話』―甲州の伝説をよむ

講師 長谷川千秋(山梨大学教授)

6月24日(土)・7月15日(土)・8月12

日(土)

講座2「教科書に載った児童文学とその作家たち」

講師 牛山恵(都留文科大学名誉教授)

6月8日(木)・7月13日(木)・8月10日(木)

※講座1・2とも午後2時

会場 講堂(定員500名)

○講座3「山梨の文学」

「みんなで『走れメロス』を読む」参加型講座

9月7日(木)午後2時

講師 笠井里香(当館教育主事)

会場 研修室(定員150名)

※お申し込みは当館備え付けの申込用紙かお電話でお願いします。

○子ども映画会 申込不要

7月29日(土)アニメ「チリンの鈴」

8月6日(日)アニメ「火垂るの墓」

いずれも午後1時30分

会場 講堂 定員500名

■展示室

○第一～四室展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など

山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する

各コーナーの展示替えとともに、第一

室で期間限定の資料展示を以下のと

おり行います。

・夏の常設展

夏目漱石生誕150年記念

山梨県立美術館出品協力

「漱石とJ. F. ミレー」

6月6日(火)～7月17日(月・祝)

「漱石と樋口五葉」

7月19日(水)～8月27日(日)

・秋の常設展

夏目漱石生誕150年記念

「漱石―手紙の達人」

8月29日(火)～10月15日(日)

○第五室の展示替え

山梨県出身・ゆかりの文学者104名を

二期に分けて展示。

・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリ

ズム・戯曲・脚本・童話・童謡

4月29日(土・祝)～9月3日(日)

・10月7日(土)からは、詩・短歌・俳句・川柳・漢詩のジャンルを展示しま

す。

※第五室は、9月5日(火)～10月6日(金)は休室します。

■閲覧室

○閲覧室資料紹介

・「山本周五郎を読む」

6月18日(日)まで

・「山梨に生まれた作家たち」

7月15日(土)～8月27日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

太宰治(6月19日生まれ)

6月9日(金)～6月22日(木)

飯田龍太(7月10日生まれ)

6月30日(金)7月13日(木)

○書庫見学

6月10日(土)

午前11時～午後2時の二回

○第二十六回やまなし文学賞募集開始

六月一日より十一月三十日まで小説

部門と研究・評論部門の応募を受け付

けます。詳しくは文学館HPを御覧ください。

館 の 日 誌

- 3・10(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「李良枝」～3・23(木)
- 3・12(日) やまなし文学賞表彰式
- 4・14(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「土橋治重」～4・27(木)
- 4・29(土・祝) 特設展「歿後五十年 山本周五郎展」開始～6・18(日)
閲覧室資料紹介「山本周五郎を読む」～6・18(日)
- 4・30(日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 5・6(土) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 5・7(日) 第一回読書会
- 5・11(木) 年間文学講座Ⅱ「浜田広介『ひろすけ童話』の世界—『泣いた赤おに』『椋鳥の夢』」
講師 牛山恵(都留文科大学名誉教授)
- 5・13(土) 文学創作教室「初心者短歌教室」第1回
講師 三枝浩樹(歌人)
- 5・14(日) 名作映画鑑賞会「椿三十郎」
- 5・21(日) 年間文学講座Ⅲ(特設展関連講座)「手紙に見る周五郎の心情」
講師 保坂雅子(当館学芸課長)
- 5・27(土) 年間文学講座Ⅰ『裏見寒話』から山梨のことばと文化をよむ
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 6・3(土) 文学創作教室「初心者短歌教室」第2回
講師 三枝浩樹(歌人)
- 6・4(日) 特設展関連ワークショップ「ペーパークイリングで風鈴を飾ろう!—周五郎が描いた江戸の暮らしをイメージして」
講師 佐々木綾子(ペーパークイリング作家)
茶室「素心菴」にて呈茶
- 6・8(木) 年間文学講座Ⅱ「佐野洋子『生きる』の意味を問う物語—『おじさんのかさ』『100万回生きたねこ』」
講師 牛山 恵(都留文科大学名誉教授)

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00～17:00 (入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00～19:00 (土・日・祝日は18:00まで)
- 講 堂・研修室 9:00～21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)
- 茶 室 9:00～21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30～16:20

■休館日 (7月～9月)

- 7月3・10・18・24・31日
- 8月21・28日
- 9月4・11・19・25日

■常設展観覧料

	個人	団体 (20名以上)	美術館 共通券
一般	320円	250円	670円
大学生	210円	170円	340円

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方と介護の方1名、並びに高校生以下の児童・生徒の観覧料は無料です。

■年間フリーパスポート(定期観覧券)のご案内

文学館常設展・企画展を1年間何回でも観覧できる年間フリーパスポート(定期観覧券)を発売しています。

料金は、一般1,540円、大学生770円です。

■県内宿泊施設利用者割引のご案内

山梨県内の宿泊施設へ宿泊または宿泊予約された方で、宿泊当日または翌日に観覧される場合、個人でも団体料金でご観覧いただけます。宿泊(予定)を証明するもの(領収書・予約クーポン券等)を窓口へ提示してください。なお20名様以上の団体は対象になりません。

■施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申込は、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。

☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込の際、ご説明いたします。

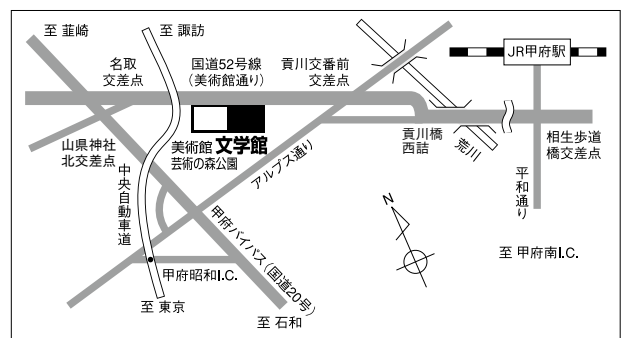
■アクセス

中央自動車道甲府昭和ICから

料金所を昇仙峡・湯村方面へ出、200m先左折、徳行立体南交差点左折、アルプス通りを約2km直進、貢川交番前交差点左折、国道52号を葦崎方面約1km左側。

JR中央本線甲府駅から

南口バスターミナル1番乗り場から「御勅使」、「竜王駅経由敷島営業所」、「大草駅経由葦崎駅」、「貢川団地」行のいずれかで約15分。「山梨県立美術館」下車。(料金280円)。タクシーで約15分(料金1,700円程度)



山梨県立文学館 館報 第102号

平成29年6月10日発行

編集兼
発行人 三枝 昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

※紙面の無断転載はお断りします。